

ゆるがぬ暮らし

季刊地域

現代農業

2010年11月増刊

AUTUMN 2010

No. 03

2010年11月1日発行

昭和21年11月17日第3種郵便物認可

ISSN 0289-3512

定価 900円

空き家を宝に

「地域の茶の間」から「うちの実家」へ／子育て支援拠点「ばあちゃんち」

島に貢献する人を選ぶ活用法／春までひとつ屋根の下「のくとい館」

戸別所得補償どう生かす？

いまさら聞けない Q&A／飼料イネと堆肥で地域内循環

米粉パン工房の建設資金に／米粉ならぬ「ごはんパン」／大人気 GOPAN って？



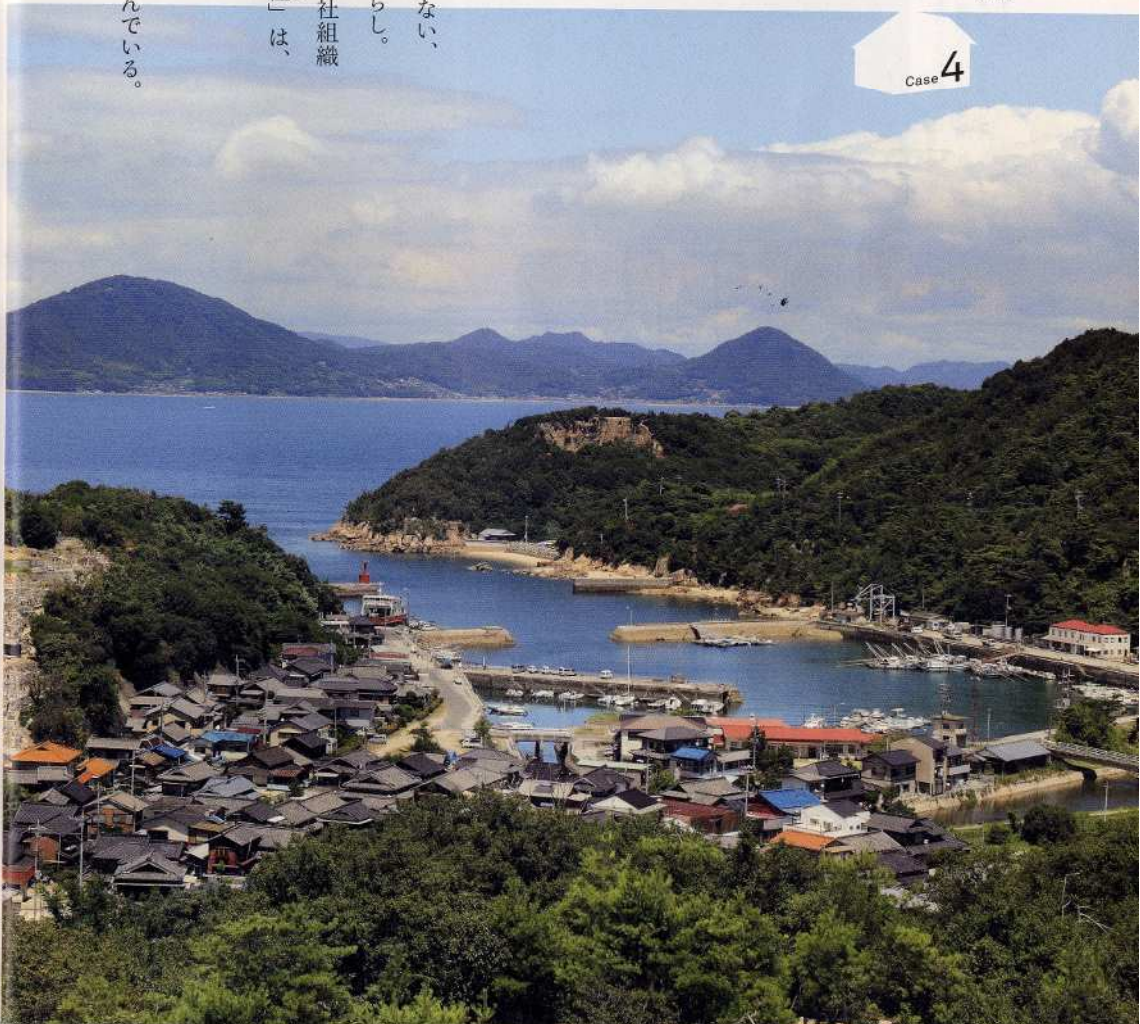
島に貢献する人を選んでもこそ空き家活用

岡山県笠岡市
NPO法人「かさおか島づくり海社」

文：守屋基範（NPO法人かさおか島づくり海社常務理事）
写真：鈴木佳



Case 4



空き家率は5割。

コンビニがない、仕事がない、
ないないづくしの島暮らし。

だけど全島民参加の会社組織

「かさおか島づくり海社」は、

（地域が移住者を選ぶ）

空き家対策事業で、

島に新しい風を吹きこんでいる。

島は日本の縮図

2人に1人は高齢者



守屋基範さん（47歳）
「行政職員として地域を知り、現場で仕事を
する喜びを学んだのが「島づくり海社」でした」

私 は現在、笠岡市役所産業経
済観光活性化課の職員ですが、
平成13年、市長特命の「島おこし
海援隊」として9年間、空き家対
策をはじめ笠岡諸島の活性化に携
わってきました。NPO法人かさ
おか島づくり海社営業部長の肩書
は、観光の業務とリンクし今も続
いているもうひとつの顔です。

* 岡山県の南西端にある笠岡諸島
は、瀬戸内海のと真ん中に位置す
る大小31の島々。そのなかには、「
御影石」の産地として知られる北
木島（人口1136人）や国指定の

重要無形民俗文化
財の「白石踊」が
継承されている白
石島（人口655
人）、映画「瀬戸内
少年野球団」のロ
ケ地となった真鍋
島（人口298人）
など、有人7島におよそ2400
人が暮らしています。

笠岡諸島の過疎化がはじまった
のは、昭和35年以降のこと。当時、
笠岡諸島全体で1万1000人あ
った人口が、昭和45年には847
4人と、わずか10年で2500人
が島から離れました。人口の減少
はその後も続き、半世紀たった今
日では4分の1となりました。

同時に高齢化率も陸地部の29・
9%に比べ、島は58・5%と著し
く、2人に1人が65歳以上と、ま
さに日本の超高齢化社会の縮図と
もいえます。

Point 1

島をひとつに、心はひとつ
持ちまわりの「島の大運動会」

平 成7年から住民主体の事業
に市が助成するまちづくり
支援事業がはじまり平成9年、そ
の報告会に参加した島の有志が
「島を元気にする会」を結成。
翌年、6島（大飛島・小飛島はひ
とつに数える）合同の運動会をして
島同士のつながりを密にしようと、
第1回「島の大運動会」が北木島
で開催されました。当時は3000
人が参加するにぎわいぶり
です。

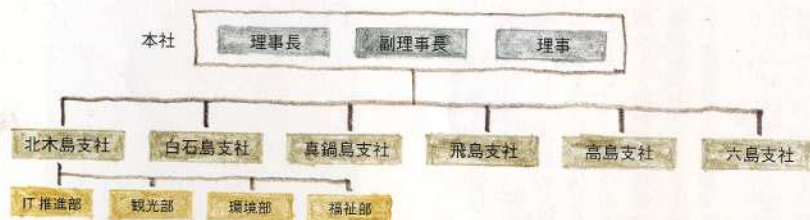
その後は開催地区を毎年持ちま
わりにし、今年再び北木島で13回
目の運動会を開催。なんと3巡目
のスタートを切ったのです。

毎回の企画は開催地で実行委員
会を結成、島の特色を出したユニ
ークな競技が検討されています。
「できる人が、できることをしよ
う」と、今年も運動会といなが
ら、午前中は「舞う」をテーマに、
白石踊や真鍋島保育所のお遊戯、

サルサダンスなど、いろいろな踊
りでもとめあげ、午後は島の島に
ちなんで3人で、100kgの石を
引く人間バンパ競争や戦争反対砲
弾投げ（もちろん砲弾は石製）、最
後の島対抗リレーのバトンまでも
石製というこだわりようです。

お年寄りは飛んだり跳ねたりの
運動が困難なので、午前中は島内
一周のウォーキングで、他の島の
人たちと交流しました。

ところで、この運動会が行なわ
れる前は島同士のつながりがほと
んどありませんでした。船で会っ
ても、同じ島以外の人とは会話を
交わさないのが普通、ましてや他
の島へ行く用事もなかったのです。
結果的にこの運動会がきっかけ
で、島おこしも連携して行なおう
という機運が高まり、平成14年、
島づくり海社の前身となる任意団
体「電腦笠岡ふるさ島づくり海社」
の設立へとつながるのです。



主な支社事業

〈北木島支社〉
 ・ 廃校を活用した夏季研修
 ・ 島内タクシーの運行
 ・ 「しまべん」の取り組み

〈飛島支社〉
 ・ 島内タクシーの運行
 ・ 椿油の製造

〈白石島支社〉
 ・ 出前白石踊体験会
 ・ 島の盆ツアー
 ・ 助っ人クラブ

〈高島支社〉
 ・ 竹炭の生産
 ・ 「しまべん」の取り組み

〈真鍋島支社〉
 ・ 幸せの黄色い旗 (安否確認)
 ・ マナコッチウォーク
 ・ 空き家巡りツアー

〈六島支社〉
 ・ 水仙球根植えツアー
 ・ ばへの木コースターづくり

Point 2

島民全員が社員の会社を設立
 「かさおか島づくり海社」

「島づくりをサポートしてくる職員を派遣してほしい」という島民の要望を受け平成13年、市長特命の島専門担当「島おこし海援隊」を結成。職員3名(私を含む)が島に派遣され、島の活性化を模索しつつ「電脳笠岡ふるさと島づくり海社」の開設を支援することになりました。

岡山県のフロンティア地域活力創造事業(540万円)を受けて設立した島づくり海社は、6つの島ごとに公民館長や自治会長などから支社長を選出して支社を立ち上げ、各支社から出された事業企画に対して本社の役員会(各支社長ほかで構成)の承認を受けて実行するという仕組みです。

その際、たんに補助金の消化に終わらないよう事業費の3割は5年以内に本社に償還する責任を内規に決めました。限られた財源のなか、島全体を会社組織と考える

高島支社環境部長は、宿泊客の「定年後には、こんな島で暮らしたい」という声を耳にして空き家の活用を思い立ちました。

高岡士が利益をあげながら、笠岡諸島全体でお金をまわすことが島づくり海社の目的です。

本社の事務局は海援隊が担当。本社事業は6島の共通課題の解決に向け、事務局が中心となって企画を立て空き家対策や全体のPR活動などが進められました。

その後は平成18年、法人格を取得し「NPO法人かさおか島づくり海社」となることで、介護保険事業や過疎地有償運送事業への参入も可能となり、事業規模も大きくなりました。また、19年は離島振興事業補助を受けて専任の事務局長も雇用できました。

平成21年度の総事業費は8700万円、県の中山間地域魅力づくり支援事業(690万円)や内閣府の地方の元気再生事業(1500万円)などの補助事業を活用しながら、毎月の役員会を経て各事業を展開しています。

島民の声

人口増が目的ではない
 人材発掘のための空き家対策



NPO 法人かさおか島づくり海社理事長 晴本浩二さん (56歳)

私は北木島出身で、高校卒業後、石材業勤務を経て平成元年に株式会社グローバル・ストーンを設立しました。若いころから地元の青年団にも携わっていたので、高齢化で空き家が増え、島のコミュニティが崩壊していくことに人一倍危機感をもっていたのでしよう。平成7年のまちづくり支援事業以降、行政と連携しながら「島づくり海社」にも力を注いできました。

「空き家対策事業」は平成15年にスタートしましたが、当初はまだ行政主導の考え方。多くの移住者を島に呼び込むことが先決で、「月1万円の空き家で島暮らしをして、みませんか」と、広くPRしました。けれど、島暮らしはコンビニや飲食店がないなど日常生活の不便や、地域の共同作業や消防団、PTAなどの役もありました。やがて、島になじめない移住者も出てきて、島民から「結局あの人は何をしに島に来たのか」という声が、島づくり海社にも

寄せられてきたのです。行政まかせではなく、「島のことを一番よく知る」島民が真剣に考えなければ未来はありません。「島に空き家があるから住んでください」ではなく、島で何をしたいのか、何ができるのか、そうした島暮らしの目的と定住の本気度を試す必要があります。そこで、営業部長の守屋さんと二人で面接をはじめたのです。面接では、「島で暮らしたい動機は?」「島で何ができますか?」といった質問をします。また、家族構成を聞いて子育て世代なら、迷わず少子化が著しい真鍋島をすすめます。移住者に空き家を選ばせるのではなく、この人ならこの空き家がいいと、こちらが決めてしまうのです。移住者に受け入れ側が期待することを明確に伝えることが大事だ、と思います。笠岡諸島の空き家対策は、人を増やすことよりも、新しい人材によって島に動きをつくることかねらいたからです。(談)

Point 3

島民を一変させた
 高島支社の「空き家対策事業」

高島で家業の旅館業を営んでいた妹尾昭正さん(当時の高島支社環境部長)は、宿泊客の「定年後には、こんな島で暮らしたい」という声を耳にして空き家の活用を思い立ちました。

そこで平成14年、空き家の持ち主に家を貸してくれないかというアンケートを送付したのですが、所有者50名の返答は「いずれもノー」。「盆や正月に帰るから」「定年後に帰るかもしれないから」という理由が大半でした。

妹尾さんは、現在島に暮らしている人と島を出ている人の意識の違いに愕然としましたが、翌年、なんと自身内の空き家4軒を確保してインターネットで公募したので、メディアで取り上げられた効果もあり平成16年、空き家対策事業初となる滋賀県からの移住者を受け入れることになったのです。

その後も空き家対策事業はメディア

イアに支えられ、多いときには月400件を超す問い合わせがあり、空き家に関する電話やメールは本社に一元化することにしました。

当時は1万円の家賃(現在は1万5000円)で募集していたので、「1万円の空き家ありますか」という人には、「もう人が入ってしまいました」と言うと、半分の200人は電話を切り、「仕事もコンビニもありません」と言うと、さらに100人が電話を切ります。結果、残った100人を対象に8回の空き家巡りツアーを開催しました。

そのなかで、移住希望者は潜在的に島暮らしへの憧れをもっているが、定住の本気度にはかなり個人差があることが見えてきたのです。同時に、移住希望者のなかから地域が必要とする人材をどう選ぶか、それには地域の課題を明確にする必要があると気づかされました。



給食弁当に民子さん得意の「まつな」のコマ和えも登場

子育て世代なら真鍋島 廃校の危機を救うのは移住者組



近藤真一郎さん (37歳)
近藤民子さん (35歳)

平成19年9月、兵庫県神戸市
かび2人の子どもを連れて
真鍋島に移住した近藤さん夫妻と
の出会い、「島づくり海社」の私
(守屋)が運営しているブログへの
書き込みから始まりました。

近藤真一郎さんは3年前まで、
神戸市内で在宅介護支援事業所を
経営していましたが、介護関係の
事業所の乱立で、利用者よりも経
営が優先される事態に疑問を感じ
て閉所。「都会の教育環境にもスト
レスを感じていたので、島でのび
のびと子育てをしたい」と、移住
に踏み切ったといいます。

はじめ近藤さんは、北木島を希
望していましたが、当時、真鍋小
学校が廃校の危機にあつたので、
私は真鍋島に暮らす島づくり海社
副理事長の森本洋子さんに連絡を
とって、強引に真鍋島の下見をす
めることにしました。

どうか来てくださいというのが普
通。受け入れ側に移住者を選ぶ権
利があるのか」と、近藤さんの書
き込みはきびしい内容でした。

だが真鍋島に下見に来た日、近
藤さんの不満は一変したのです。
この日は、PTAや漁協などで
つくる青少年健全育成連絡協議会
が主催する夏祭りの日。当初は日
帰りを予定していた近藤さんでし
たが、祭りの打ち上げにも招待さ
れ、その場に居合わせた漁協の専
務と意気投合するなかで、漁協の
事務の仕事も決まってしまうたの
です。下見から戻った近藤さんか
らは、「ぜひ真鍋島に移住したい、
というメールが私に届きました。」

近藤さんのホームページ「真鍋
島しまぐらしのスヌメ」には、「田
舎暮らしのよさは、他人と関わり
ず勝手気ままに暮らすことではな
く、「人と人とが共存し暮らす」と
いう古きよきライフスタイルに他

なりません」と、祭りの日の感動
や、移住して気づいたことがつづ
られています。

空き家の改修にも島民が積極的
に協力しました。近藤さんが月
1万5000円で借りている家
は、昭和30年代に建てられた木造
2階建ての家。ひとり暮らしの80
代の女性が亡くなって10年、空き
家になったところを静岡に住んで
いる家族に承諾をとった家屋です。
浄化槽の工事は80万円ほどかか
るので、トイレは汲み取り式にし、
抜ける寸前だった床をフローリン
グに改修しました。空き家活用で
ネットとなる家主の家財道具一式
は、家族の了解ですべて処分、市
役所で2トンを車を用意し、島民と
2日がかりの作業でした。

改修期間中は、森本さんが夏場
使われていない「海苔工場」を無
償で提供。近藤さん一家は1カ月
間そこで暮らしたといいます。

近藤さんは町内会や消防団にも
さっそく入り、神社の草むしりに
もすすんで参加しました。

近藤さんの妻の民子さんは、移
住した翌年1月に3人目、さらに
平成21年10月に4人目の子どもを
出産。子育ての合間をみて、公共
施設の清掃の仕事をしています。

島民の声

観光案内&給食弁当 マナコッチハウスは島のよろず屋



NPO 法人かさおか
島づくり海社副理事長
森本洋子さん (52歳)

私は真鍋島の出身で、29歳のと
き漁師の夫と結婚して島に戻
るまでは、大阪の銀行に勤めていま
した。結婚して10年間は、夫の海苔
工場を手伝いながら子育てに専念し
ましたが、このまま何もしなければ
島が取り残されると、島づくり海社
にも設立から関わってきました。

「マナコッチハウス」は平成18年、
90㎡の借地に建てた木造2階建て
の島の拠点施設です。総工費は
700万円ほどかかりましたが、思
い切って自費で建てました。

当時、島特産の食材を使った手づ
くり弁当「しまべん」が、島づくり
海社の事業としても立ち上がってい
たので、大量発注にも対応できる広
い調理場がほしかったのです。1階
を観光案内所と調理場、2階は休憩
所にして観光客や島民が自由に使え
るようにしました。

今年から力を入れているのが、島
民向け給食弁当の配達サービス。私
が40代の頃、中国電力の電気検計員

の仕事で島の家々を回ったとき、漬
け物だけごはんを食べているお年
寄りを見て愕然としました。真鍋島
にはコンビニも飲食店もありません。
その時から給食弁当の必要性を
感じていました。

数年前、笠岡市内の給食業者が廃
業した際に、ガス釜(白付き)2000
円、弁当の容器1個50円と格安で買
いそろえました。現在は火曜日と木
曜日の週2回、給食弁当をつくら
せて50ccのバイクで配達して回っていま
す。さすの南蛮漬けや唐揚げにポテ
トサラダ、お浸し、漬け物など入っ
て1食400円。1日の注文は30食
くらいです。

仕込みは朝7時からはじまります
が、移住者の近藤民子さんが手強い
に来てくれて助かっています。娘の
朱里ちゃん(小学校5年生)にも配
達を手伝ってもらうことがあり、4
軒配って200円のお駄賃。時には
配達先でお小遣いをもたらすこと
もあって、本人も大満足です。(感)

また今年からは、高齢者向けの配
食サービスを行なっている森本さ
んの「マナコッチハウス」で、週
2回(時給800円で午前中3時間)
のアルバイトをはじめました。

「子育てをしながら働けるのも、
ここでは地域で子どもを育てると
いう風土があるからです。都会で
は考えられないことですが、子ど
もたちがどこで遊んでも誰か
が見てくれているので安心です」
と、民子さんは話します。

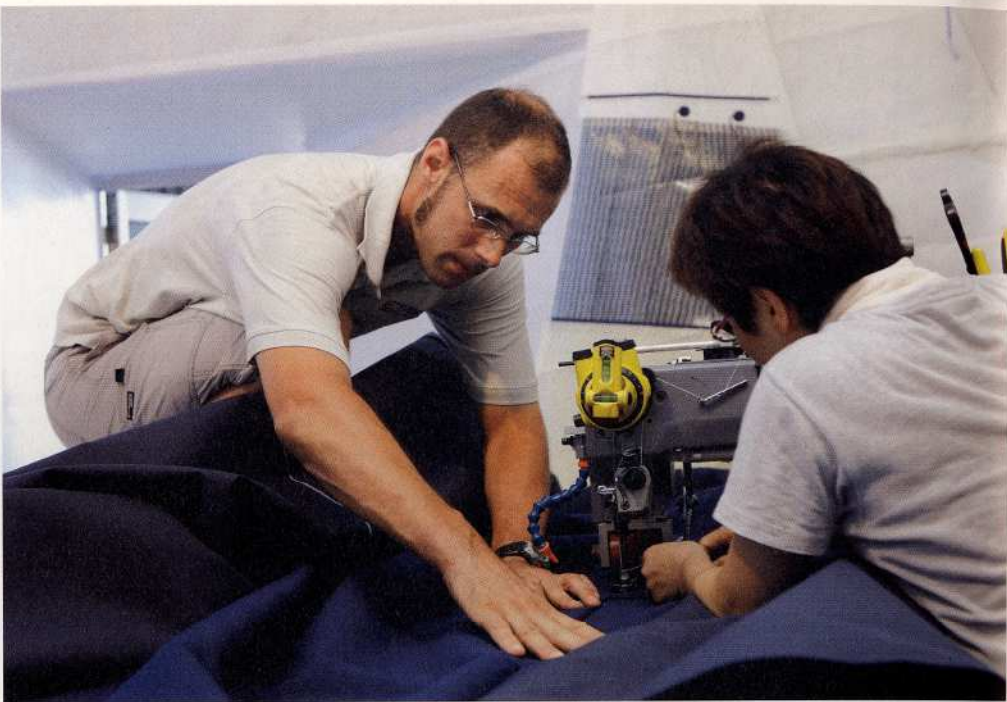
平成20年、5人の子どもがいる
家族が島を出たことがきっかけで、
子育て世代を呼び込むために「明
日の真鍋島を創る会」が結成され
ました。PTAを中心に島民を巻
き込んだ「真鍋で子育て島せんか
体験ツアー」は、近藤ファミリー
の移住体験を再現したツアーで、
8月の夏祭りに合わせて限定2家
族が真鍋島に招待されています。

この年、広島県福山市から家族
6人で移住した中室さん夫妻はツ
アーに参加したうちの1組。先輩
移住者である近藤さん夫妻のきめ
細かなフォローが、中室さん夫妻
の移住の決め手となりました。

現在、真鍋島保育所に通う子ど
もは8人、うち7人は近藤さんと
中室さんの子どもたちです。



通所介護施設「だんだんの家」(だんだんとは、方言で「ありがとう」の意味)は定員10名で、週3日(午前9時~午後3時)、スタッフ7名は全員島民



島の新しい仕事づくり。大型ミシンでヨットの帆を縫う

— 白石島発 —
待ち望んでいたエキスパート
経験を生かして介護施設の開設へ



小泉美津子さん (57歳)

平 成19年、兵庫県尼崎市から白石島に移住した小泉美津子さんは、30代後半から高齢者福祉にかかわってきた方です。特別養護老人ホームなどに勤め、介護福祉士やケアマネージャーの資格を取得。市内でグループホームを立ち上げ、施設長として働いた経験もある福祉のエキスパートです。当時、北木島に開設されたデイサービス「ほほえみ」に続き、白石島でも空き家を活用した通所介護施設の開設が計画されていたので、島づくり海社は小泉さんに白石島への移住を斡旋し、関係者とも会ってもらうことにしました。福祉・医療の人材不足は島の課題。移住には周囲も協力的でした。小泉さんの家は、80代の女性が亡くなり、5年前から空き家になっていた築40年の木造平屋建て。小泉さんは台所と床、天井を中心に改修しました。家主の家財道具は、入居前に家族に仕分けてもらい、不用なもの片づけは、島づくり海社が市からゴミ収集の2トンを借りて回収。引越は近所の方にも手伝ってもらいました。やがて小泉さんは介護相談員として、笠岡諸島の高齢者宅を訪問。30人の高齢者の歩行や食事など82項目を調査するなかで、陸と同じ介護保険料を払っても多くの島民が利用できる在宅サービスはヘルパーだけという現実と直面しました。介護福祉の現場意識が蘇ってきたのか、即戦力としてデイサービスの立ち上げに向けて力を発揮してくれました。

平成21年に開設された通所介護施設「だんだんの家」では、管理者・生活指導員として仕事に携わり、現在は地元の人に運営を引き継ぎましたが、地域が求める人材を仕事に結びつけたモデルのひとつとなりました。

— 北木島発 —
消防団に入り、神輿もかたぐ
むらづきあいこそ大切に



フェレル・コリンさん (40歳)

カ ナダ出身のフェレル・コリンさんは空き家対策事業初の外国人移住者です。平成18年、瀬戸内海の真ん中で趣味のヨットを生かしたビジネスをおこしたいと、兵庫県伊丹市から移り住んできました。初めて島に着いたとき、「船から降りたら地元のおばあさんがワァーと、それも方言で話しかけてくれたのが嬉しかったです」と、コリンさん。日本人の移住希望者が地元になかなかとけこめず、移住者どうしで固まるケースも少なくないなか、コリンさんは、町内会の草刈りに参加し、祭りの神輿も担ぐなど、積極的に地域とかわわってきました。なによりもむらづきあいがある大事と、笠岡市初となる外国人消防団員としても活躍しています。自宅は「島づくり海社」が紹介

した豊浦地区の高台にある空き家。築30年、鉄筋2階建ての家は、かつて石材会社の社長が使っていたヘリポートと格納庫付きの家屋で、家賃は1万5000円です。その後、コリンさんは平成20年に石材の廃工場跡を活用した船舶用品販売会社「ゆうこうマリン」を立ち上げ、ヨットのセールやロープのインターネット販売、船外機付きのゴムボートの販売などを手がけています。石材の空き工場もある展示場であり絶好の条件だったといいます。家主が早く処分したいということもあり、150坪の敷地と大型クレーン付きの建物を数百万円で買取りました。今では工場内にヨットの帆を縫うための大型ミシンを設置し、地元的女性4名を含む7名を雇うなど、島の仕事づくりにも貢献しています。

空き家対策 5つの極意

1 空き家バンクはつくりにくい

「空き家バンク」をつくって早いもの順に空き家を埋めていく空き家対策には、地域住民の意志はありません。笠岡諸島の空き家対策は、空き家を減らすこと、人口を増やすことが一番の目的ではなく、住民にとって必要な人材を確保することに主眼を置いています。

2 家を見せずに人・地域を見せる

移住希望者は、まず住む家を見ながら

ますが、家より先に現地の人や暮らしを見せることが大事。

下見の時点で一人でも多くの住民と話すことで、移住後の人間関係もスムーズになります。家に住むというより地域に住むという意識を移住希望者に持ってもらいたいです。

3 移住者が決定してから家を探す

どんな移住者が家に入るのかわからない段階で空き家を貸してほしいと頼んでも、実感がわかない家主には断られやすいものです。

実際に移住者が決まり、その人が地域の困りごと（例えば福祉・医療）を解決できる資質や能力を持っていれば、逆に家主は断りにくいことが多いようです。

4 移住先の島は島づくり海社が決める

島づくり海社では移住希望者にひとつの島しか見せません。複数の島を見せてまわると、かえって移住者が迷う原因になります。

島づくり海社が移住者に最も合う島と現地での相談相手を紹介するようにします。

5 仕事は自分でつくるもの

島に仕事はありません。本気で移住を希望している人の発想で仕事はつくるものです。たとえば石屋の事務所を見てレストランにした人、コリンさんのように島でネットビジネスを立ち上げる人など新しい着想が島に動きをつくります。また、島が課題としていることから地域貢献型の仕事をおこなうこともできます。

教えて！
守屋さん



「島づくり海社」流 空き家対策

〒714-0301 岡山県笠岡市北木島町 3802-53
E-mail kasaokaistands@gmail.com http://www.shimazukuri.gr.jp/

空き家を確保する工夫 ——貸せない理由の解決法

家のなかに家財道具があって

——「差し支えなかったら、島づくり海社で片づけて、無料で処分させていただきます」

市のゴミ収集車を借りて、海援隊と地元住民、移住者が不要物の処分を行ないます。

——「家主がいつ家に戻ってきてもいいようにまとめておきます」

空き家の部屋のひとつ、もしくは離れを家財道具の物置にします。

盆と正月には帰ってくるので

——「短期契約の体験空き家として貸していただけますか？ 盆と正月は家主さんのために家を空けるようにしますので」

高島では盆と正月を除いて月単位で借りられる空き家を1軒用意できました。

近所の人や親戚の目があって

——「行政がどうしても貸してくれと言うから仕方なく貸したと言ってください」

地元の人に家主の情報収集をお願いし、家主との最終交渉は海援隊が契約も含めて行ないます。また、定期借家契約により最長5年（家主の都合で短い場合もある）の賃貸で、借り主の権利が主

張されない仕組みづくりに配慮しています。さらに家主には費用がいっさいかからないように、改修作業は移住者側の自費にしています。

借主が途中で出ていってしまう

——「島づくり海社が、家を借りた時点で火災保険を1年分（1万～2万円）負担します」

これは移住者が借りた家を途中で出た場合でも、引き続き次の移住者に紹介できる家としてのつなぎになります。また家主が海社以外の紹介で家を貸す前には、島づくり海社に一報が入る仕組みになっているので、知らない間に貸し出される心配もありません。

（編集部）

旧公会堂を改修した湖侍茶屋「五里五里」は、島民の憩いの場（真鍋島）



Point 4

10年後に戻りたくなる島へ 「子ども笠岡諸島振興計画」

空 き家対策事業での移住者は、6年間で32世帯72人、そのうち6割の移住者が現在も島に根づいて暮らしています。

こうした移住者の仕事づくりによって島に少しずつ動きも出てきました。空き事務所を活用したレストラン兼民宿が観光スポットになった例や、介護福祉士などの資格やノウハウを生かして島民とともに福祉サービスを向上させている例など、動きはさまざまです。

島づくり海社の平成21年度の収入は、介護事業が3300万円と最も多く、空き家対策事業は110万円（家賃1万5000円、うち5000円が海社収入）となり、事業の成果が出てきています。これからは、空き家対策でつくり出された動きを生かして、Uターン促進の呼び水となる環境づくりを進める段階だと思えます。そのひとつが平成21年に開催さ

れた「子ども島づくり会議」。笠岡諸島で暮らしている現役の中学生10名と、島を離れて笠岡市内で下宿している高校生3名が、「子ども笠岡諸島振興計画」を作成しました。10年後、自分たちが島に戻りたくなるような6つのアイデアを提案、その実現に向けた活動をおとなたちに呼びかけたのです。

真鍋島のほししいものがそろっている地域密着型コンビニ「サークルM」の構想もそのひとつ。使われなくなった旧公会堂を改修した交流施設「五里五里」を、朝市の開催やお年寄りが日替わりで島の伝統食を提供するレストラン、観光客のための土産物屋などが入った地域密着型のコンビニとして活用するアイデアです。

島に飲食店やコンビニがなく、買い物に不便という子どもたちの悩みが次の事業のヒントになり、新しい雇用の場もつくれそうです。